

洞庭に臨む (孟浩然)

八月 湖水 平か なり

虚を 涵して 太清に 混ず

気は 蒸す 雲夢 沢

波は 撼かす 岳陽 城

濟らんと 欲するに 舟楫 無し

端居して 聖明に 恥ず

坐して 観る 垂釣の 者

徒らに 魚を 羨むの 情有り

八月湖水平 涵虚混太清

氣蒸雲夢澤 波撼岳陽城

欲濟無舟楫 端居恥聖明

坐觀垂釣者 徒有羨魚情

解説 作者が洞庭湖に臨んで作り、張丞相(張九齡のこと)に献上したものを。

語釈 ※洞庭||洞庭湖のこと。 ※八月||旧曆の八月で、川の水が増え、湖水のみなぎる時。 ※涵虚||涵はひたす。虚は大空。 ※混太清||天の一番高いところ。 ※氣蒸||たちのぼる水気。 ※雲夢沢||雲夢の地方にある大湿地帯。雲沢・夢沢の二つの沢地を合している。 ※岳陽城||岳陽のまち。 ※欲濟無舟楫||この湖水を渡りたいと思うのであるが舟がない。 ※端居||何もしないでぶらぶらしていること。 ※恥聖明||聖天子の治められている太平の世でありながら、仕官もせずぶらぶらしていることを恥ずかしく思うの意。 ※坐||何もせず、手をつかねて。 ※羨魚||魚を得たいと思う。才能もなく工夫もせずに、仕官することばかりを求めることをいう。

通釈 旧曆の八月、洞庭湖の水は満々と漲り、水平線のあたりは大空をひたして天と一つに連なっている。立ち上る水気は遠く雲夢の大湿地帯にまでわたってたちこめ、うち寄せる大波は岳陽城をもゆり動かすかと思われるほどである。自分は、この湖水を渡ろうと思うのであるが、舟もない。仕官したいと思うのであるが、自分を引き立ててくれる者もないので、何もせずに聖天子の治められている太平の世に、ただぼんやりとしていることを恥ずかしく思うばかりである。ここにすわって、湖水の魚を釣っている人を見ていると、魚が欲しいと羨む気持ちが湧く。(また役人となって働きたいという心持ちが起こる)